

真木

第 179 号

〒261-0004

千葉市美浜区高洲

1-14-9-503

田所節子方

千葉県俳句作家協会

事務局

TEL 043-277-1056

〒299-1143

君津市君津台 2-8-4

石井紀美子方

「真木」編集部

TEL 0439-52-6254

千葉・県民芸術祭 第58回千葉県俳句大会

◆千葉県俳句大会を終えて

千葉県俳句作家協会が県民芸術祭に参加する千葉県俳句大会は、今年で五十八回目を迎えました。半世紀を超えて脈々と続いてきたこの大会を盛会裏に終了することが出来たことを、ご来賓はじめ皆様方にまず御礼申し上げます。

今回は一般の部の事前投句が昨年を大きく上回る一八七〇句となり、大会当日各二句ずつ投句の席題句も二五二句に達しました。また昨年からの俳句の裾野を広げるため「ジュニアの部（小学生・中学生）」をスタートさせましたが、第二回目となり七五二名の参加者がありました。

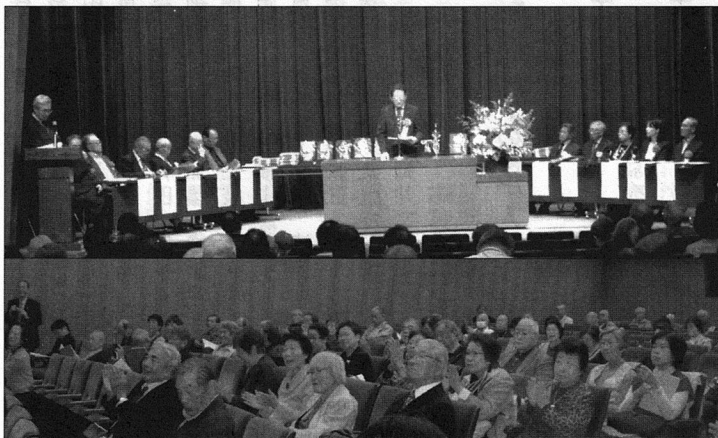
当日は一般参加の方々と共に、表彰された児童・生徒ばかりでなく、付添の保護者の顔も見え、高齢化が進む俳句界に若さと活気が漲って未来に明

るい見通しとなりました。

今回の招待選者は山崎聰氏（現代俳句協会・響焰主宰）、増田善昭氏（日本伝統俳句協会・千葉県ホトトギス会会長）、鈴木節子氏（俳人協会・門主宰）のお三方にお願いして、それぞれ選後有意義なご講評を頂きました。

来賓挨拶から応募句表彰・席題句会・ジュニア俳句表彰、さらに席題句成績発表などと盛沢山な行事をそれぞれの担当者が遅滞なく会を進めて限られた時間内に無事に終了することが出来ました。この場をお借りして改めて、選者の方々、前日の準備からご協力を頂いた役員の皆さんに改めて感謝して結びいたします。

実行委員長 三枝かずを



会場風景

目次

千葉・県民芸術祭第58回千葉県俳句大会	1
協会設立四十五周年記念新春俳句大会・祝賀会のご案内	5
秋季吟行会	6
千葉県俳壇ニュース	9
ひろば、会員著書紹介	10
合同句集第九集珠玉抄（元）	11
会長 能村研三選	12
第2回千葉県俳句大賞、第31回協会賞の作品募集	12
受贈誌より、新入会員一句、事務局日誌	12

千葉・県民芸術祭 第58回千葉俳句大会

【一般の部】雑詠入賞者

千葉県知事賞 千葉 昼間たつお

沖へみな足を投げ出す砂日傘

千葉県議会議長賞 匠 菅谷たけし

洗はれて大根太くなりにつけり

千葉県教育長賞 君津 広上 あい

滝の音聞こえてよりの男坂

千葉県俳句作家協会会長賞 習志野 美濃 律子

炎昼や轍の中にある轍

千葉日報社賞 君津 石井紀美子

一声が土管の太さ牛蛙

千葉市観光協会会長賞 香取 奥村 利夫

初産へ手話のごとくに毛糸編む

優秀賞 香取 保坂 和郷

鳥になるまでふらこを漕いでをり

稲刈つて棚田百枚解き放つ 千葉 椿 良松

地にマグマ沖に潮鳴り燕来る

木更津 三苦 知夫

雪明り入れて柵を閉ぢにけり

成田 安部由美子

秀逸賞 我孫子 遠藤 爽介

夕立晴硝子細工のやうな街

君津 森 孝子

決心のうしろる明るき夏木立

市川 楠原 幹子

人生の第五章日向ぼこ

柏 大山 茂

穠田や余生のごとく吹かれをり

我孫子 大海かほる

万緑の底なる隠れ耶穌の里

千葉 大久保文夫

葺替へて音のすがしき水車小屋

松戸 林 ゆみ

墨痕のかすれを涼と呼びにけり

富津 長濱 聰子

北斎の波サーファーを驚擲み

柏 井上けい子

洞窟にのこる声あり沖繩忌

香取 郡 香織

夕顔や農夫貧しき詩を愛す

大網白里 小河原清江

パリ祭すずらん通りに馬車の音

佳作賞

金子日出子 須田眞里子 西本 幸

田所 節子 平野ふき子 三枝かずを

重田 忠雄 徳吉洋二郎 藤岡 貞夫

福川いつみ 村田 満枝 門谷 杜人

細根 栞 加藤 峰子 齋藤 和子

徳永 政代 三枝ふみ代 後藤 輪子

新津 藜子 横山遊邦子 実初 繁

奥 保夫 馬淵 津枝 榎本 明美

金田めぐみ 國武 和子 榎本 明美

猪俣 昇 栗原 公子 望月 晴美

三木 千代 岡井マズミ 石橋みちこ

(応募数九三五組 一八七〇句)

【ジュニアの部】入賞者

(小学生の部)

千葉県教育長賞 相模台小四年 安藤 匠

ばあちゃんのふる手小さく盆終わる

千葉市教育長賞 ちはら台桜小五年 石毛 陽翔

学校が遠くに見える夏休み

千葉県芸術文化団体協議会長賞 清見台小五年 佐瀬 彩夏

白蝶は光の中から舞い降りる

千葉県俳句作家協会会長賞 ちはら台桜小六年 飯田 圭悟

なつやすみ終わって重たいランドセル

優秀賞 花見川第二小二年 鈴木 美音

ヒマワリは太ようがすき空がすき

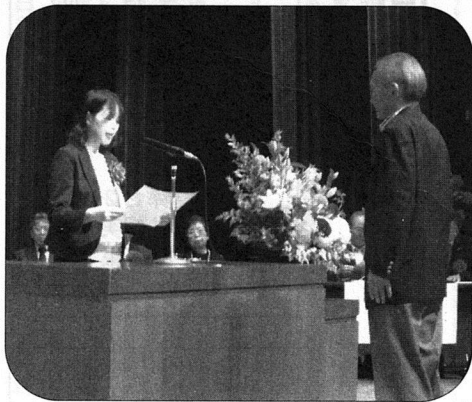
南清小三年 田口ひなた

あめんぼがララララとのおどってる

岡谷 綾馬

ひまわりだニコニコわらうきみのよう

市川 綾馬



千葉県知事賞の昼間たつお氏

- 々々 南清小三年 渡辺 奈菜
 めだかたち水の中ではにんじやだよ
 々々 相模台小一年 安藤 怜
 かきごおり山の大きさをくらべっこ
 々々 ちはら台桜小四年 西川明日花
 せん風機ああおおおおへんな声
 々々 六年 田中 佑
 せんぶうき前にかがんで宇宙人
 々々 鶴舞小四年 宮寄 柚和
 祭りには花がらゆかた着ていこう
 々々 鶴枝小三年 村田 琴音
 ひまわりの花の大きさをわたしの手
 々々 ちはら台桜小五年 平山 桜汰
 ゲロゲロ口かえるが歌う雨が降る
 々々 六年 鶴岡 杏
 ひまわりと背のびしながら背くらべだ
 々々 海上小五年 鶴岡 一輝
 さくらの木まどからみればさくらの絵
 々々 木更津第一小三年 川崎 史菜
 夜月とお話してる月見草
 (中学生の部)
 千葉県教育長賞 河原塚中一年 橋口 葵
 花びらが追い越していくセーラー服
 千葉市教育長賞 久寺家中二年 漆坂 武大
 木下闇日向と違う風吹ける
 千葉県芸術文化団体協議会長賞 三年 荒井 裕貴
 透明の水を彩る金魚かな
 優秀賞 二年 村田 悠
 口の中別の世界だかき氷



大会挨拶・三枝実行委員長

鳥「秋の声」と決まり、会場に掲示された。受付をすませた参加者が、歳時記を開きながら、会場内外の場所から、句作にとりかかり、俳句大会は引き締まった雰囲気となった。今回は「秋の声」というや、抽象的な季語もあり、

◆大会記

十月十六日(日)、これまでの不順な天候から、漸く安定した秋晴の日となった。俳句大会の出席者は、表彰式も含め約一八〇名(俳句大会参加者一般一二七名、ジュニアの部の受賞対象の少年少女関係者約五十名)の盛大な俳句大会となった。九時半に川合憲子副理事長の用意した季語の中より、会場一番乗りの参加者が選んだ席題は「椋

- 々々 久寺家中二年 岡 亮汰
 この季節木々がぼくらの日傘役
 々々 三年 久保 直也
 夏の朝目覚まし時計は蟬の声
 々々 三年 齊藤 汐里
 はやく起き夏の暁一人じめ
 々々 二年 村岡 瑛
 向日葵は空を夢みて上を向く
 々々 二年 大久保集成
 夜空から星が見守る夏祭り
 々々 二年 高橋 健太
 浴衣着たあの子に心惹かれけり
 (応募数一人一句 七五二句)



左より招待選者 山崎 聡、増田善昭、鈴木節子の諸先生
 左4人目より来賓
 千葉県環境生活部県民生活・文化課副課長 山田邦子様
 千葉市文化連盟会長 藤代謙二様
 千葉日報社代表取締役社長 萩原 博様



賞品の数々

苦吟の様子も見られた。投句締切は十一時。本年度より、大会前半で事前応募の表彰が行われた。開会式は秋尾理事長の司会進行。増成副会長の開会の辞。三枝実行委員長挨拶。ジュニアの部が二回目となり、順調な滑りだした旨の紹介があった。能村会長から、①千葉県俳句大賞新設の件(第一回大賞受賞・大串章氏の「海路」)②協会賞新設(従来の協会賞・新人賞を一本化)により応募数の増加。③伝統文化の継承者としてジュニアの部の継承・拡大。④従来の「新春懇親俳句会」を、更に充実したい旨の提言がされた。来賓として、千葉県環境生活部県民生活・文化課山田副課長、千葉市文化連盟藤代会長、千葉日報社萩原社長、其々の方にご祝辞を戴いた。開会式の最後に各協会の招待選者、鈴木節子、増田善昭、山崎聡の先生方と、当協会顧問の三苫知夫、水見壽男氏の紹介があった。

引き続き、事前応募句（一般の部一八七〇句）の表彰式が行われた。県知事賞を始め佳作賞まで賞品が授与された。中締めは塩野谷仁副会長。休憩・昼食後、司会は田所事務局長に替り、十三時より俳句大会再開。千葉県芸術文化団体協議会秋原勲会長よりご挨拶を戴いた。

協会役員紹介後、選句稿配布、十四時選句締切。出句数二五二句。選句は一般参加者三句選、役員・招待選者五句選（内特選一句）。選句の間、会場はしばらく静寂の時間が流れた。選句締切後披露。披露は加藤、荒木（甫）、細根、村上の各理事が担当。なお役員、招待選の特選者には、披露の都度短冊が贈られた。招待選者先生方よりは応募句の選句について、句の背景等に言及した興味深い、丁寧な講評・鑑賞があった。

表彰式に入り、司会は川合副理事に交代。



会長 能村 能評

賞者には表彰・賞品が、俳句作家協会能村会長他より授与された。最後に、能村会長による講評があり、大会は塩野谷副会長の挨拶で滞りなく終了した。（北川照久記）

◆ 席題の部 席題「秋の声」「棕鳥」

【招待選者詠】

むくどりや梯子運んでゐるところ 鈴木 節子
 秋の声土壁の跡に城の戸に 増田 善昭
 挽歌ならん昭和平成秋の声 山崎 聰



席題一位の斉藤すず子氏

【招待選者特選句】

鈴木節子特選 秋声やあなたの裏の淋しさよ 石井紀美子
 増田善昭特選 秋の声聴かまく人は黙すべく 三枝かずを

山崎 聰特選 秋の声聴かまく人は黙すべく 鈴木 節子
 むくどりや梯子運んでゐるところ

【入賞句二句合計点と代表句一句】

千葉市長賞 16点 斉藤すず子

棕鳥や空に投網を投げしこと

千葉市議会議長賞 14点 椿 良松

棕鳥の鳴き尽くしたる後の闇

千葉市教育長賞 12点 中島悠美子

熟るるもの日に日に濃ゆしむくの群

千葉市文化連盟会長賞 12点 中村 世都

棕鳥の群れては夕日沈めをり

千葉テレビ放送賞 11点 石橋みちこ

振り向けばだあれもゐない秋の声

- 6位 水底に藻の長々と秋の声 11点 岡本 秀子
- 7位 彫像の碑文のうすれ秋の声 10点 三苦 知夫
- 8位 やさしさは黙にもありて秋の声 10点 茶谷 静子
- 9位 からつぼの樹と棕鳥の群るる樹と 10点 増成 栗人
- 10位 棕鳥の万の呪縛を解かれけり 10点 相山 賢三
- 11位 足跡をたどれば渚秋の声 9点 本城 宏基
- 12位 棕鳥や旅の日暮はすぐに来て 9点 菊地 光子
- 13位 棕鳥の群れ降ることし湧くことし 8点 坂本 正夫
- 14位 城跡にもものふの声秋のこゑ 8点 平野みち代
- 15位 秋の声リボンで括る母の文 8点 美濃 律子
- 16位 大小の城の石垣秋の声 8点 大海かほる
- 17位 秋の声硝子のビルは傷持ちぬ 8点 林 ゆみ
- 18位 むくどりや梯子運んでゐるところ 7点 鈴木 節子
- 19位 野の草を引けば風立つ秋の声 7点 染谷 卓
- 20位 水琴の音色かそけき秋の声 7点 平野ふき子
- 21位 棕鳥や都庁一氣に騒ぎ出す 6点 金子日出子

22位	椋鳥や山懐に恩師の碑	6点	すずき巴里	伊藤 隆	伊藤 博康	上田 玲子	内山 重喜
23位	秋の声残る一つは看取りの灯	6点	奥村 利夫	宇根 幸子	大川田鶴子	大久保文夫	大沢美智子
24位	家といふ伽また皆椋渡る	6点	森井美恵子	大沼田 昭	大海かほる	岡井マズミ	岡本 秀子
25位	秋の声曠野の端のボブ・テイラン	6点	門谷 杜人	小野 正之	香川 綾	柏崎清一郎	加藤 東風
26位	隠れ湯に父母もいて秋の声	6点	加藤 圭子	加藤 節雄	加藤 峰子	加藤 圭子	金沢りつ子
27位	明日才への妻の寢息や秋の声	5点	柏崎清一郎	金子日出子	川合 憲子	川崎 直子	菊地 光子
28位	秋声へ天守かげろうとごろなし	5点	清野 敦史	北川 昭久	北野 善正	清野 敦史	楠原 幹子
29位	手に重き光悦茶碗秋の声	5点	上田 玲子	国武 和子	倉岡 けい	栗原 公子	黒子 静
30位	椋鳥や群れねばならぬ寂しさよ	5点	伊藤 博康	後藤 旦公	小林 豊子	三枝かずを	三枝 青雲
31位	ブロンズ像の細き指先秋の声	5点	佐藤 克江	坂田美代子	齊藤 哲子	齊藤ふみえ	坂本 正夫
32位	秋の声老いも病も受け入れて	5点	清水 和子	相山 賢三	重田 忠雄	重廣ゆきこ	塩野谷 仁
33位	椋鳥の点描画法動き出す	5点	平岡 育也	清水佑実子	白鳥紅星子	代田 雅文	菅谷たけし
34位	夕景といふ一刻を椋渡る	5点	高橋キミ子	鈴木さとみ	鈴木 節子	鈴木 秀子	すずき巴里
35位	椋鳥やひとりに広き家屋敷	5点	重田 忠雄	染谷 卓	高瀬 竟二	高橋キミ子	高橋 敏夫
大会出席者 (五十音順)				瀧田 照子	田所 節子	棚橋 朗	谷本 元子
秋尾 敏	秋廣ののみ	東 國人	安部由美子	茶谷 静子	月岡 千秋	椿 三五郎	椿 良松
荒木 甫	荒木 洋子	飯田 協子	池田 恵子	富澤 昭子	豊島 京子	中尾 教子	中島悠美子
石井紀美子	石澤 はる	石田きよし	石橋みちこ	長濱 聰子	中村 世都	棗 梢伊	新津 黎子
				西本 幸	能村 研三	服部 直道	林 ゆみ
				平岡 育也	平野ふさ子	平野みち代	久染 康子
				昼間たつお	廣 章子	広上 あい	藤岡 貞夫
				藤寄 弘乃	藤代 康明	古谷 誠司	細根 栞
				本郷 政信	本城 宏基	増田 善昭	増成 栗人
				松本よし彦	水見 壽男	三苫 知夫	美濃 律子
				村上喜代子	夔 秀麿	本池美佐子	森 孝子
				森井美恵子	門谷 杜人	山内 洋光	山崎 幸子
				山崎 聰	吉岡 一三	吉野 正一	以上(二十七名)

(田所節子記・撮影松本よし彦、すずき巴里)

千葉県俳句作家協会設立四十五周年記念 新春俳句大会・祝賀会のご案内

当協会は昭和四十六年に設立して四十五周年を迎えました。これを記念して、来賓各位のご来駕を仰ぎ、新春俳句大会・祝賀会を開催いたします。会員皆様お誘いあわせの上ご参加くださるようご案内申し上げます。

日時 平成29年2月11日(祝) 受付十二時

会場 ホテルプラザ菜の花
千葉県中央区長洲1-8-11
TEL 043(222) 8271

新春俳句大会 午後1時 3階 菜の花

・投句 二句(事前出句) 欠席投句不可
本投句用紙を使用してください。

・投句料 一、〇〇〇円

・今回、一般選はありません。協会役員による選句とします。

祝賀会 午後3時 4階 榎

・会費 五、〇〇〇円

申込み締切 1月10日(火) 必着

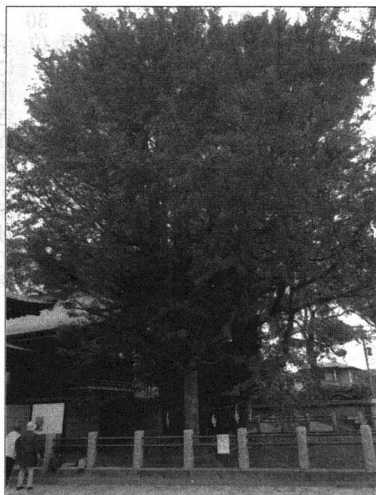
※新春俳句大会、祝賀会の参加を明記の上、住所、氏名、電話番号を記入し、俳句大会のみ参加は投句と千円、俳句大会及び祝賀会参加は六千円を同封して、左記の大会事務局までお申込みください。(現金書留または郵便小為替で送付。会費の返却は出来ません。)

送り先(大会事務局)
〒260-0852
千葉県中央区青葉町1-27-4-14 加藤峰子方

千葉県俳句作家協会 新春俳句大会係
電話・FAX 043-225-7115

平成28年度 秋季吟行会

市川市八幡界隈



国の天然記念物・千本公孫樹

吟行記

九月二十六日(日)、朝から曇り空の、むしむしとした暑い日でしたが、吟行をするのに、晴天も曇天も雨風や寒暖のすべてが句材になるのだと、諾いつつ吟行地の市川八幡へと向かう。

葛飾八幡宮は、参道を京成線が横切っており、随神門に続いて本殿を正面に、力石や駒どめ石、神楽殿、いくつもの御社、富士塚など、何より神木の千本公孫樹には圧倒され、句材には事欠かない。句帳を手には皆熱心に由来書を読み、空を木々を見上げては漫ろ歩く吟行の人達で境内は占められている。

八幡界隈は、古いお屋敷に混じって新しい屋敷

の並ぶ路地と老舗がうづくまるようにビルの間にある表通り、処々に古く大きな黒松が傾いている街道など、それぞれ雰囲気を持つ界隈で、歩いていて飽きない。

文芸風土の豊かな所として、多くの文人が暮らしていたのも然りである。近くには永井荷風旧居や水木洋子邸がある。また千葉街道をはさんで八幡不知藪という竹材の一画が祠と共に在る。かつてはその藪中に入ったら二度と出られないと言われていたほど密に広く不思議なスポットだったらしいのだが、今はその面影はない。

句会場は、市川市文化会館地下の大会議室で、十一時から受付開始、二句出句の締切は十二時。参加者は九十九名であった。

十三時開会。秋尾敏理事長の司会で、予想以上の参加者を得たと述べられて開会する。

能村研三会長の挨拶では、東京に隣接する市川市の概要と、芸術文化の街の歴史や現在の紹介、また林翔、柴田白葉女ら俳人の地であったこと、そして毎日見ている地元が吟行地なので戸惑うと、そして千葉県俳句大賞と協会賞の募集のこと等々述べられた。

続いて句稿三枚が配布され百九十八句から選句。十四時三十分、加藤、村上、小野三氏による披講。休憩の後、会長、各副会長、顧問による講評。

其々のユニークな選評に聴き入る。

十五時四十分、田所事務局長より成績発表。会長、副会長、理事長、副理事長、事務局長、顧問の特選には、作者へ短冊が贈呈され、一位から十五位に会長より賞品を渡された。

十六時二十分、秋尾敏理事長の閉会の辞をもって吟行句会は無事終了。

文化会館前で、参加者全員の記念撮影。にぎやかな撮影のひとときであった。撮影後解散、まだ



会場風景

名残惜しく歓談している人、三三五五と連れだつて駅に向かう人、充実した吟行の一日であったと思う。

会場に戻り、机や椅子の片付け作業。二次会の出席者は三十名ほどで、楽しく盛会であつた。

今回秋季吟行会では、地元という縁もあつて、受付から、案内、会場整備や後片付け等々「沖」の方々には大変お世話になり感謝いたします。

(中村世都記)

秋季吟行会作品集

特選句

能村研三会長特選

粗に密に秋声そよぐ藪知らず

すずき巴里

水見壽男顧問特選

柏手の一つ一つに秋澄みぬ

日岡 育夫

三枝かずを副会長特選

もう水に映らぬ高さ鳥渡る

原 瞳子

増成栗人副会長特選

武の神の小さき椿の実なりけり

川合 憲子

秋尾 敏理事長特選

世話人が居て学寮に月祀る

後藤珠祥子

川合憲子副理事長特選

露路地の八幡登四郎白葉女

能村 研三

田所節子事務局長特選

神域を出れば踏切いわし雲

木之下みゆき

入賞者と代表作品 (○内は順位)

① 神域を出れば踏切いわし雲

木之下みゆき

② 露路地の八幡登四郎白葉女

能村 研三

③ 力石・駒留め石も露の石

岡澤 田鶴

④ 秋声や竹百幹の藪知らず

塩野谷慎吾

⑤ 断腸亭草深くゐて昼の虫

北川 昭久

⑥ 日面と日裏九月の大公孫樹

中村 世都

⑦ 垣間見る文人の庭秋思濃く

三枝かずを

⑧ 日を溜めて秋果がひとつ水木邸

大沢美智子

⑨ 藪知らず故事茫茫と竹の春

小野 正之

⑩ もう水に映らぬ高さ鳥渡る

原 瞳子

⑪ 秋気澄む千本いちようの男振り

矢野 忠男

⑫ 色鳥や在りし日のまま水木邸

本池美佐子

⑬ 露けしやかくまで狭き不知藪

栗原 公子

⑭ ちちろ鳴く宇宙の隅の藪知らず

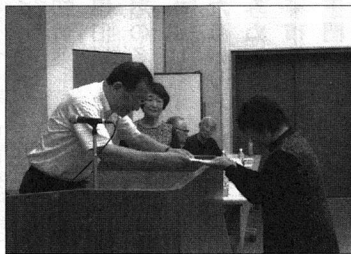
浅野 吉弘

⑮ 秋高し路地にあふるる文士秘話

清水佑実子

能村会長挨拶

一位受賞の木之下みゆき氏



(写真提供・藤代康明氏)

その他の作品

穴惑そこは八幡の藪知らず

小見 恭子

千本の銀杏寄り添ふ爽やかな

田所 節子

木犀の香り初めたる水木邸

大久保文夫

秋彼岸踏まずにのぼる涙石

西村 渾

鳥渡る踏切そばで待つと言ふ

山崎 幸子

千草満つシナリ才凛としてゐたり

和田 満水

色変へぬ松塀はばみ道阻み

中山 和子

ぶり返す秋暑や暗き藪知らず

菅谷たけし

ほんとうの秋を探していた荷風

秋尾 敏

不知森色なき風も入ったきり

岡崎 寅雄

小さな秋ひろう千年の根っこ

小林 俊子

藪知らずたちまち秋の蚊に好かる

森岡 正作

色変へぬ松もつつまし荷風邸

岡 真紗子

黄門の祟りの血ひく残りの蚊

藤岡 貞夫

屋ちちろ真間全山を膨らまし

藤代 康明

石榴裂くは光年の闇の喪失

諸藤留美子

千本の子孫囲ひの大銀杏

久染 康子

逝く秋の風の錯綜藪知らず

柴崎 英子

秋深む風も通はぬ藪知らず

佐々木よし子

藪知らず怖いもの知らず秋の蝶

石井紀美子

秋海棠踏切渡る荷風の背

宮崎 高根

世話人が居て学寮に月祀る

後藤珠祥子

粗に密に秋声そよぐ藪知らず

すずき巴里

八幡宮入れば銀杏匂いけり

新井 京子

踏切にリズムありけり猫じゃらし

金子日出子

秋蝶来拝殿昼を灯しをり

谷本 元子

秋風や黒々と坐す力石

石橋みちこ

爽籟や千本公孫樹の注連のゆれ
 千本公孫樹に遊び足らぬか穴まことひ
 路地狭し垣に溢るる酔芙蓉
 萩揺るる低き家並みの門前町
 魚形の水木表札金木犀
 見据ゑる阿形吽形秋のこゑ
 青インクの原稿掲示秋うらら
 八幡回遊最後に笑う石榴の実
 銀木犀シネマの華の呼吸音
 豊年や朱の神門に映ゆる木々
 秋の蝶迷路入り組む八幡町
 かつ井に荷風影ろひ昼の虫
 千本公孫樹色無き風に幣ゆるる
 夏草の意のまま眠れ荷風邸
 天高し千史刻みし大銀杏
 垣透かし梨の実垂るる水木邸
 秋暑し数多の伝へ藪知らず
 寂しきは荷風旧居の草の花
 高木水木表札二枚水引草
 木の実落つ捨て身の音を聞かまほし
 大絵馬に供ふ秋草昼ともし
 草の香の俳句横町ぞろぞると
 竹春の風は八幡の藪知らず
 秋晴れや天まで届け本の塔
 竹幹の高さに秋のかたつむり
 秋暑なほ荷風の旧居路地の奥
 埋めたてて山となる島小鳥来る
 豊の秋本殿抱くご神木
 「浮雲」の生まれし邸の銀木犀

上田 玲子
 楠原 幹子
 池田 恵子
 望月 晴美
 石川 笙児
 武藤 嘉子
 豊島 京子
 倉岡 けい
 山口 明
 荒井千瑛子
 加藤 節雄
 平山 武彦
 堀川 麗子
 白鳥紅星子
 松本まき子
 川崎 直子
 茶谷 静子
 細根 栞
 佐藤 克江
 水見 壽男
 菊地 光子
 増田 豊子
 須田眞里子
 樋口 英子
 岡本 秀子
 久礼 隆志
 村上喜代子
 宮下 桂子
 荒木 洋子

万葉の手児奈の里の水澄めり
 実柘榴や案内図裏に書く一句
 千年を守るや公孫樹の初黄葉
 露草や呼び鈴ありぬ荷風旧居
 竹の春不知の杜に伊勢屋の名
 その中を満つる秋気ややぶしらず
 武の神の小さき椿の実なりけり
 拍手の一つ一つに秋澄みぬ
 竹の春藪知らずより仰ぐ市旗
 老人とやんまに応と仁王門
 千本公孫樹なほ枝を張り穴惑
 鳥渡る古八幡・八幡・本八幡
 秋風となぞなぞして藪不知
 曇り日の色となりたる花木槿
 秋澄むや大鐘一打のねぢり紐
 小鳥来る千本公孫樹の傘下かな
 山門を素風に押され潜りけり
 荷風不在の朽塀さみし秋の風
 涙石いわれも哀れ秋の暮
 白蛇棲む千本公孫樹天高し
 露草や節の間に三不思議
 秋風の随神門の朱を撫でる
 雨上り柿の美いよよ輝きぬ
 力石羽根を休める秋の蝶
 さやさやと神社守りて大銀杏
 秋の日や荷風旧居は人の住む
 秋たけなは美の成る樹木の水木邸
 ためらわず入る秋の蝶藪知らず

伊藤 隆
 成田 美代
 溝呂木信子
 荒木 甫
 大網 健治
 木村 美翠
 川合 憲子
 日岡 育夫
 埴 誠一郎
 安藤しおん
 平城 静代
 諸岡 和子
 町山 公孝
 増成 栗人
 加藤 峰子
 吉田 政江
 中西 恒弘
 井上けい子
 藤井 元基
 宇留野ひとみ
 平岡 育也
 佐々木 群
 追川 信子
 小川恵美子
 下平 誠子
 原田 達夫
 三枝 青雲
 重田 忠雄

(田所節子記・撮影細根 栞)



市川市文化会館前にて (撮影・秋尾 敏 理事長)

千葉県俳壇ニユース

第五十四回柏市民俳句大会

柏市俳句連盟主催の第五十四回柏市民俳句大会は、八月二十七日中央公民館において、一〇二名の参加を得て盛大にとり行われた。

招待選者・会長・顧問（敬称略）、上位入賞者及びその代表句は次の通りである。

招待選者 実籾 繁・秋尾 敏・水見壽男・北川 照久・鳴戸奈菜、会長 藤岡貞夫、顧問 松田雄姿。

入賞者（互選三句合点 代表句
市長賞
小鳥来る父となりたる朝の髭 井上きよ美
議長賞
筆順を乱して燃ゆる大文字 三鬼 彰市
教育長賞
割箸のきれいに裂けて初秋刀魚 大藪 智子
会長賞
負けさうな三墨側の大西日 浦野 五郎
⑤ 紙魚走る最初で最後の父の文 吉田 叔子
⑥ 水中花寂しい時は水を足す 吉田 叔子
⑦ 二学期へ結び直しぬ靴の紐 星野 一恵
⑧ あぶくひとつ夜の金魚のひとりごと 立花 光夫
⑨ 終戦日平凡な日のまぶしくて 松尾 涼
⑩ かなかなに鎌倉五山明け渡す 本城 宏基

（柏市俳句連盟 鈴木一三記）

木更津市文化祭第四十回市民俳句大会

日時 平成二十八年九月二十四日（土）一時～

会場 木更津市立中央公民館

主催 木更津市文化協会 参加者三十六名

入賞者（三句合点）代表句

① 待つ事も待たれる事もなき夜長 齊藤すず子

② 姿見に寄りて離れて敬老日 児玉 笑子

③ ゆさゆさと村がふくらむ秋日和 國武 和子

④ 一病に断つもの多し鳳仙花 馬淵 津枝

⑤ どの道を行くも一人や水澄めり 氏家 幸子

⑥ 新生姜びりりときまる身のこなし 坂井美美子

⑦ 追伸のような一日桐一葉 中沢 一紅

⑧ 田を売って離れる母郷捨案山子 柏崎清一郎

⑨ 一人とは遠かなかに気付くこと 広上 あい

⑩ 朝顔の庭に向けたる椅子ひとつ 岩瀬由美子

（木更津市文化協会 保坂ミエ子記）

俳人協会千葉県支部秋季吟行会

俳人協会千葉県支部主催の第二十一回秋季吟行会が、平成二十八年九月三十日（金）松戸市二十一世紀の森と広場を吟行地に、森のホール21（松戸市文化会館）で開催された。長雨が続いていたが、当日は穏やかな秋日和の下、百十八名（二三六句）が参集した。

十三時大野崇文幹事の司会で開会。増成栗人支部長の挨拶に続き、能村研三副支部長の「俳句の手帖」―手帖に何を刻むか―の講演。九十三歳のお元気な下鉢清子顧問の講評に感激。十六時四十分、村上喜代子副支部長の閉会の辞で終了。

① 身の透くるまで秋風の中にある 村上喜代子

② 一本も百本も寂曼珠沙華 中村紀美子

③ 森深し朽ち木に灯ること茸 太田 住子

④ 常磐木の森の深さや昼の虫 大山 春江

⑤ 木道につづく木の橋小鳥来る 綱島 清

⑥ どの径も水辺へ通じ野紺菊 前澤 宏光

⑦ 水にふれ草に触れ天高きかな 中山 和子

⑧ 小鳥来る古代住居に火の匂ひ 原 瞳子

⑨ 木の実草の実縄文の火の匂ひ 西野 桂子

⑩ 森は秋紙石蝕の匂ひして 森井美恵子

⑪ 稲架架けの余りしところ蕎麦襖 鶴巻 和男

⑫ 大きな違ふ団栗手の平に 横田 尚美

⑬ かつと晴れ蜻蛉の空となりけり 青木かつ子

⑭ 逆光の水はしりけり曼珠沙華 飯田 晴

⑮ 秋澄むや水に影おくレストラン 渡辺みよ子

（川合 憲子記）

「獺祭」誌新主宰に本田攝子氏

「獺祭」は前主宰宮本径考氏の逝去にともない、本田攝子副主宰が、第七代目の主宰を継承された。歴代の師の声しかと法師蟬 本田 攝子

（「獺祭」九月号より）

「原人」誌創刊七十周年記念・最福寺に俳句扁額を奉納

三枝青雲主宰「原人」は、平成二十九年九月に創刊七十周年を迎えるに魁で、東金市の最福寺に同人三十一名の俳句を扁額に納め奉納し、九月一日に奉納式典を執り行った。掲額の作品より

湖きさら風またきさら山ざくら 三枝 青雲

紅葉舞ふ木の階段に木の手摺 金子日出子

親ゆび姫乗つてみさうな花筏 成田 恵子

蓮枯れて流転の力根に残す
天領の余風灯しぬ冬紅葉

西本 幸
平山 武彦
〔原人〕十月号より

結社賞

平成二十八年年度「鴻」結社賞

第十回「鴻」賞 西野桂子

底紅に蜂蜜いろの夕日かな

桂子

第二回「鴻」特別功労賞 飯川久子

青空を毀さぬやうに剪定す

久子

第十回「鴻」新人賞 横尾かな

参州の日溜りに置く次郎柿

かな

第一回「鴻」底紅賞 富吉俊子・杉山時子

〔鴻〕四・七月号より

会員著書紹介

●句集『美点凝視』

池田啓三 著

「野火」誌名誉主宰の句集『春炬燵』につぐ第五句集。岡山県生まれ、市川市在住。平成二十二年から二十六年の作品三二五句を収載。

表題は、初学の頃の師の教えに因み、美点凝視を心掛けてのこと、と。題字を書家の紫舟氏揮毫。

船頭の声を五月の風さらふ

日かげれば牡丹あやしくつつましく

雪国の雪の底より夜の電話

ほんやりとつながる五体屋寝覚

張り替へし障子明かりに墨をする

〔平成28年5月発行・角川文化振興財団〕

●『現代俳句を探る』

遊牧俳句会 編

当協会副会長を務める塩野谷仁代表の「遊牧」誌が、平成二十四年に刊行した『現代俳句を歩く』につぐ遊牧叢書Ⅱである。

「遊牧」は平成二十六年に創刊十五周年、昨年十二月には創刊百号記念号（「真木」紹介済）を発行している。本誌は、これらを祝す意味もあり、前回の書に、俳句の諸問題に論及した「現代俳句

雑感Ⅰ・Ⅱ」を編入し上梓された。

「遊牧の一句」「好句を探る」の章は、「遊牧」

八十二号から百号までの誌上に掲載の達文を収載、句集紹介の「遠交近交」と「序にかえて」を塩野

谷氏が執筆。俳句魂を揺さぶる大冊の充実集。

〔平成28年5月発行・現代俳句を探る編集委員会〕

ひろば

県内俳句協会・俳句連盟紹介

茂原市文芸協会の俳句会

茂原市文芸協会が平成三年に俳句、短歌、現代詩など、同好の諸氏が集まり発足して、機関誌「文芸もばら」を平成四年に発行しました。

今年で二十四号を数えます。創刊の頃の俳句会は、玄火茂原俳句会九名、新濤橡の会八名、つくも俳句会十一名、桃源俳句会十一名、むつわ俳句会五名、藻の花俳句会十四名、東部台俳句同好会十名と俳句に精通した指導者によるグループが、公民館等の施設で集まり句会を開いていました。どのグループにも属さない者や個人的に結社に参加している者が作品のみ発表する茂

原俳友会と教えて何と五十名近くが誌上に発表しています。

それから二十余年、指導的立場の人のご逝去で、今年の誌上発表は四十名です。創刊当時と比べると露柱庵俳句会六名、本納俳句会五名と増え、玄火、桃源、むつわの三つの会が消滅しました。茂原には、其角座十三世の斉藤一燈氏が居られて、新濤橡、東部台俳句同好会、本納俳句会などを指導されて、「文芸もばら」誌発行に際して指導的な立場で編集に関わっておられます。万緑、野火などの結社に属する人も居りますが、茂原の俳句は斉藤一燈氏に負うところが多い現状です。

〔茂原市文芸協会事務局 中村真砂雄記〕

●句集『琥珀』

岩瀬由美子 著

長峰竹芳主宰「好日」同人の第一句集。「好日」に入会し十年、傘寿という節目でもあり上梓されたとのこと。木更津市生まれ、同市に現住。

平成二十八年までの十年間の作品三三〇句を収載。序文を長峰氏、「―自然と人間の息づきが溶け合い、その風土の中に読み手を引き込むような柔らかさがある―屈託がなく、心豊かになれる好句集」と称える。青雲賞準賞受賞、俳人協会会員。

松風の果ても上総や卯浪立つ
ふるさとのよき名の梨を送りけり

十三夜蔵に名残の音色あり
秋深し胸に琥珀のペンダント

いしづみに雨情の音符秋暮るる

〔平成28年6月発行・東京四季出版〕

千葉県俳句作家協会 合同句集 第九集珠玉抄(四)

会長 能村研三 選

黒松に一郷の史あり蟬しぐれ	藤代 康明	詩の匂いなるものありぬ文字涼し	実初 繁
湯気たてて守りたきもの囲い込む	藤田 富江	冬ざくらこれ好日のいろとこそ	武藤 嘉子
着古しの二重廻しは父の色	藤原登喜子	青鷹空に従ふ沼の色	村上喜代子
破帽投げ天驚かす卒業日	古谷 誠司	立葵真つ直ぐ生きて咲き切つて	村田 満枝
全山の浅葱萌えいろ桜いろ	逸見 真三	海といふひかりの器鳥渡る	望月 晴美
冬怒涛外川千軒地響す	保坂 和郷	鈍色の雲透く程に冬満月	本池美佐子
寂光の花は風なり風は花	細根 栞	晩節の夢ほのかなり冬の蝶	森 孝子
どこまでが花野どこからが彼の世	細野 一敏	地図に無き満州国や冬山河	矢代 保子
冬の安房富士が大きく青き海	本保 富夫	版築の語る藩史や花は葉に	安田 徳子
枯山に道なき墓標並びをり	前北かおる	冬うらら紙で束ぬる巫女の髪	矢萩ゆたか
つちふるや芭蕉旅路の夕ころ	巻田 泰治	思ひ出は日傘の中の昭和かな	山崎 幸子
秋の夜や夫とは違ふ灯をともし	増田都美子	祈るとは氷柱のような壊れもの	山崎 文子
大楯は寝かせて炉火のたたずまひ	増田 善昭	絶対の愛であらうか蛇の衣	山崎 政江
藪椿誰のものにもならず落つ	増田 涼	はつとふたりどきつと苜飯の夜	山中 葛子
鷹柱立つてふ山に鷹一羽	増成 栗人	紅葉かつ散る忘却は詩の初め	湯浅 康右
大空の芯まで青し冬の鴟	松田 雄姿	郷愁は海の匂ひや鶏頭花	吉田 洋子
しばらくは濡るるにまかす花の雨	松本よし彦	語り部の話引き込む楳明り	脇坂 順雄
わけへだてなく唐辛子赤くなる	馬淵 津枝	ごとごとと武骨に廻り芋水車	脇屋よしお
諸葛菜色あざやかな物忘れ	三上 啓	裸木の本気になりし力かな	渡辺喜久子
酒を断つ夢に目ざめて爽やかに	水見 壽男	將軍の御菜浦とや初なぎさ	渡部 節郎
鎮魂の浄土への橋揚花火	三橋 和夫	白き帆がふくらむ浦の黍あらし	渡辺 輝子
赤とんぼたつた一度の肩車	三苦 知夫		

(完)

●『かずさ十句集』 かずさホトトギス会 編

当協会の副会長三枝かずを氏を中心に活動する「かずさホトトギス会」会員二十九名と生徒・児童の部一名を含む、平成二十七年年度の作品集である。毎年発行し本年度で第四十九集となる。

あとがきに会員の消息を三枝氏が執筆。同会員の活動の中、昨年の県俳句大会では、小学生の部・中学生の部で々々千葉県教育長賞受賞、一般の部で県知事賞受賞と、一位を総賞にされている。当協会員の作品のみを紹介。

影を生む日差となりて梅雨の蝶 三枝かずを
千枚の植田に沈む夕日かな 羽矢 眞人
河骨にうねり大きく鯉の寄る 増田 善昭

(平成28年7月発行・かずさホトトギス会)

●句集『銀河の一滴』 峰崎成規 著

「沖」同人、第二十七回当協会の新人賞を受賞された実力作家の第一句集。市川市生まれ、同市に現住。平成二十三年から二十八年の作品三一九句を収載。序文を能村研三主宰が、帯文を千田百里同人会長、跋文を森岡正作副同人会長が執筆。豊かな詩性と発想、しなやかな感性と観察力の見事さを称え、今後に更なる期待を寄せる。

「沖」新人奨励賞受賞、俳人協会会員。
睡蓮の雨滴小さな天を張る
轉やときめき何時も未然形
一斉に音収束す蟹の穴
銀河より一滴こぼれ水の星
足と手が出でて戻れぬ蝌蚪の国

(平成28年9月発行・鳩書房)

締切り迫る!!

第2回千葉県俳句大賞

- 【応募条件】** 千葉県に在住し、平成27年12月1日～平成28年11月30日までに刊行した句集。当協会に加盟しているか否かは不問。当協会の役員は応募できません。
- 【応募方法】** 自薦、他薦不問。葉書に「句集名、刊行年月日、刊行出版社」等を明記し千葉県俳句作家協会までお送りください。
- 【応募締切】** 平成28年12月5日(月)
- 【選考委員】** 秋尾 敏・三枝かずを・塩野谷仁・能村研三・増成栗人
- 【賞】** 賞状、記念品、賞金5万円
- 【応募先】** 〒261-0004
千葉県美浜区高洲1-14-9-503 田所方
千葉県俳句作家協会事務局 宛
- 【表彰】** ホテルプラザ菜の花にて表彰します。

第31回協会賞の作品募集

- 【募集句数】** 20句 新作未発表の作品で「題名」を付す
- 【審査料】** 3,000円 応募作品に郵便小為替同封のこと。
- 【締切】** 平成28年12月15日(木) (必着のこと)
- 【審査委員】** 秋尾 敏・川合憲子・三枝かずを・塩野谷仁・染谷 卓・田所節子・外丸和弘・能村研三・増成栗人・村上喜代子
- 【賞金】** 5万円
- 【投句先】** 〒261-0004
千葉県美浜区高洲1-14-9-503 田所方
千葉県俳句作家協会事務局 宛
※封筒表に「協会賞応募」と朱書のこと
- 【投句用紙】** 詳細は「真木」178号12頁をご覧ください。

受贈誌より

あびこ(三二六号)
吾亦紅山の日暮れの色とどめ
いには(十月号)
杉幹の一山隠す白雨かな
浮巢(十一月号)
葎蘭や水の行方を追ふ日射し
沖(十月号)
野分晴羽毛の絡む蛇籠の目
音信(十月号)
鯉の背の波紋かすかに涼新た
かずさホトトギス(五六八号)
をちこちに風禍の稲を刈り残す

染谷 卓
村上喜代子
大木さつき
能村 研三
白鳥紅星子
三枝かずを

響焰(十一月号)

原罪か原風景か早星
草の実(十一月号)
おもむろにゆきあひの雲空の秋
原人(十一月号)
縄文の火の香水の香曼珠沙華
玄濤(三十号)
団地古り人古り月見草の町
鴻(十月号)
あけくれの餅をつくす深山蟬
好日(十一月号)
暁日は時に無時間曼珠沙華
雑草(十月号)
空白も余白も秋意詩一片

山崎 聰
逸見 真三
三枝 青雲
森 章
増成 栗人
長峰 竹芳
実翔 繁

鳴(十月号)

針山に針の鎖もる桐一葉
万象(十月号)
わが墓となる大石に紅葉散る

井上 信子
大坪 景章
(次号へ続く)

新入会員一句

祭笛とどかぬ里の闇深し
母の居るやうな日暮の茄子畑

清水香津代
宇留野ひとみ

事務局日誌

- ◆第三回理事会(出席者二十四名)
日時 8月20日(土) 14時から16時
会場 千葉市「ホテルプラザ菜の花」
- 1 平成28年度秋季吟行会について
- 2 千葉県俳句大会について
- 3 第2回千葉県俳句大賞について
- 4 第31回協会賞について
- 5 会報「真木」一七九号について
- 6 千葉県俳句作家協会設立四十五周年について
- 7 事務局報告、その他

会員異動

新会員
清水香津代(松戸市) 宇留野ひとみ(千葉市)
謹 訃
宮本 径考
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

日頃、「真木」への温かいご理解とご協力に感謝申し上げます。お寄せいただいた原稿は紙面の関係にて、割愛また次号へ回さざるを得ない場合があります。今号も然り、ご容赦くださいませ。(純)